

開催地名	大阪府四条畷市
開催日時	令和6年2月25日（日） 10:00 ～ 11:30
開催場所	サン・アリーナ 25
語り部	吉田 亮一 （宮城県仙台市）
参加者	地域住民、自主防災 100 名
開催経緯	災害の少ない四條畷市においては災害伝承が難しく、市民の防災意識及び当事者意識を高めたいため。
内容	東日本大震災の経験から学ぶ日頃の活動と避難所運営 （１）防災学の考え方 自然災害はなぜ起きるのか。ということを先ずは考えていただきたい。地球は生き物であり、その地球で私たちは生かされている事が事実である。私たちには考えて行動する力があり、災害についても考えて行動することがとても重要である。 次に災害との共存について基本的な考えを周知しておく必要がある。自助・公助・共助の前段階の行動の中で危機感を持つことが重要である。なぜならば、相手は自然災害で、まさかと思われる不測の事態が充分に起こり得る可能性があるためだ。想定以上の備えをしても足りないかも知れない。 自分の住んでいる地域の災害の被害想定を学び、それ以上に備えること、例えば停電、断水、ガスが何日止まるかなどが挙げられる。断水が１週間での想定ならば、２週間止まっても大丈夫なように水の貯蓄をしておくなど。どれだけ備えが出来るかが勝負のカギである。 （２）自助・共助とは具体的に何か 自助（家庭）において各家庭で事前に対策しておくべき例として、住宅の耐震、外壁の耐震、室内の点検、備蓄品（食料・飲料水は１週間分、その他防災用品の備蓄など）自家用車のガソリンをこまめに満タンにし、家庭での防災訓練・対策が必要である。非常持ち出し袋よりも重要な防災用品６点セットがありますが、靴下、厚底のスニーカー、ヘッドライト、防犯ブザー（笛より効果的、電池がなくなるまで音が鳴るため）、携帯ラジオ、フード付きの雨合羽でスニーカーの中には靴下を片方ずつ入れておく。これをリュックに入れて常に枕元に置いておく。とにかく想定以上の備えが大事である。 次に共助（地域全体で防災を行うこと）であるが、地域防災の『地域』とは、地域内全てを指す。家庭、保育園、幼稚園、学校、消防、警察、商店会、商工会議所、医療機関、高齢者施設、企業等すべてが地域防災に関連する。日本は、小・中学校の学区体制が整っているため、学区ごとの防災が基本となる。従って、地域内の行政の様々な組織と連携するとともに、地域の学校との連携も必要である。特に学校は、災害時に指定避難所として開放されるケースがほとんどなので、学校での防災訓練の実施と、地域住民の参加が求められ、肝になってくる。 （３）避難所について

	避難所には一時避難場所、地域指定避難所、広域避難場所、福祉避難所など複数種類があるのだが、一時避難場所においては、地域の安否確認、自主防災組織の活動場所となっており、指定避難所が使用出来ない時の避難場所になっている。広域避難場所は大きな公園とか市役所、県庁などで帰宅困難者や指定避難所が使えない場合などに使われる。福祉避難所は高齢者施設やグループホームなどを指す。地域指定避難場所は大体学校であるが、地震と風水害では運営方法が違う。基本的には学校・行政は避難所運営には当たりません。そのため事前に自治体、自主防災組織、防災担当が話し合いを行い、避難所運営マニュアルを作成し図面に落とし込む作業が必要である。 避難所運営の役割としては、設営・受付・炊き出し・物資・衛生・警備・総務・介護・福祉が挙げられる。中でも、避難所において、いかに多くの避難者を受け入れることができるか、プライバシー確保ができるのか、など避難所設営にも充分な工夫が必要である。また避難所では、食中毒・ノロウイルス対策が重要である。段ボールベッドなどは便利ではあるが、むき出しのままではベッドが嘔吐などで汚れて使えなくなってしまう場合、それを片付ける作業をしてノロウイルスが蔓延してしまうので、ブルーシートで覆って使うなどの工夫が重要だ。避難所運営は便利、簡単、早い、楽、では運営できないのである。災害が発生したら便利、簡単、早いは非常に危険でデメリットが大きくなるという事を知っておくべきである。 (4) 東日本大震災では 17日間リーダーを務めた避難所では、中学生・高校生が毎日炊き出しのメニューを作成し、小学生が受付をしてくれたり、避難所の掃除をしたり、地域防災の備えが活き、様々な取り組みと地域全体の理解と協力で大震災を乗り切った。炊き出しにおいては、何時にどこで配布するかを掲示板に告知し、材料・調味料の内容も掲示する必要がある。なぜならアレルギーや宗教上の理由から食べられない場合があるためだ。
開催地より	日頃の防災活動は、各組織で訓練するのではなく校区内の組織が合同で行うのが良いということを説得力のある実体験と内容で伝えていただき、今後の避難所運営活動に通じるものがあつた。 災害に備えるためにも、講演会など啓発活動を引き続き行いたいと思う。